

背景

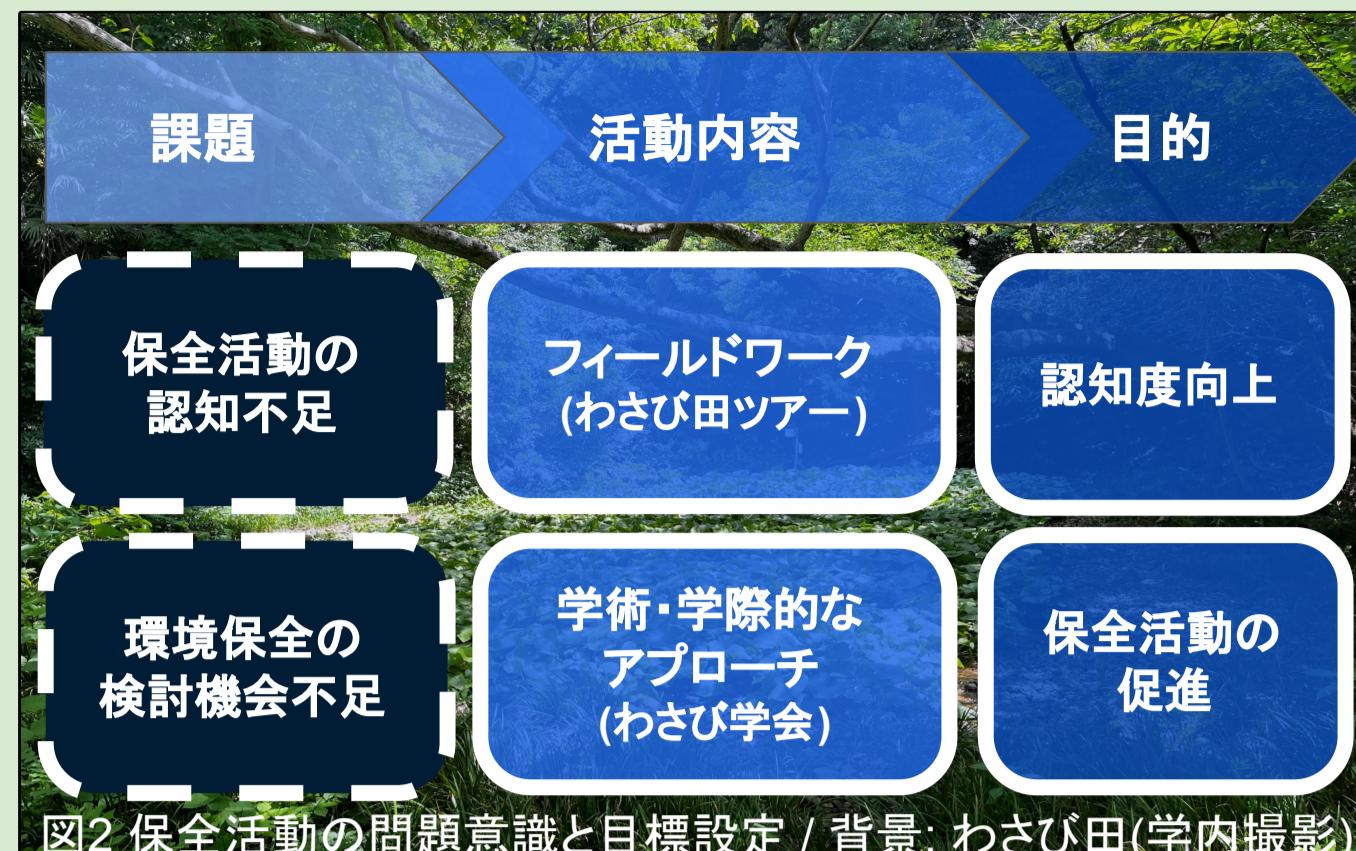
“三鷹大沢わさび”とは

三鷹市大沢に在来する固有種。
現在は栽培面積が著しく減少しており、
存続が危ぶまれている。

本学だけでなく三鷹市全体で種の保全
活動を行なっているが、**知名度や発信力に欠
けている**のが現状である。

背景: 図1 三鷹大沢わさび(学内撮影)

活動目的



みどり戦略とのつながり

本活動はみどり戦略における「多様な機能を有する都市農業の推進」のうち、「市民農園や体験農園等の利用拡大を通じた農業に対する理解醸成」に賛同している。



行政とのつながり

本学では三鷹市と連携しわさび田の保全活動を行っている。この活動は2023年に環境省「自然共生サイト」にも認定されている。

活動内容

① わさび田ツアー (2025年7月13日開催)

キャンパス内のわさび栽培プロジェクトを紹介するイベント(図5)である。開催目的は、**大沢わさびの保全活動**が大学構内で行われていることを**若者世代に周知**させることである。若者が**農業に興味を持つきっかけ**の提供、**環境保全意識**の向上、地域の**歴史文化の共有**などが期待される。また、本イベントの集客では大学公式マスコットである「はちろう」とコラボし、イベント開催ポスターの掲示やInstagram告知などに活用した。



図4 大学公式マスコット「はちろう」

図5 わさび田ツアーフローチャート

② わさび学会 (2025年9月10日開催)

異なる分野の教授陣を招待し実施した、学術的な議論をするパネルディスカッション(図6)である。開催目的は、わさびを**学術的に考察し多角的な学問領域を活用したプレゼンテーション**によって、わさびの**時間軸と学術的な視座の違いを体験**することである。そのため本イベントでは**専攻分野を問わず**、学内全の在学生を対象とした。

また学術的なわさびの議論だけでなくわさび田ツアーをはじめとした、大学構内でのわさび田に対する取り組みを発信することで、**農業を身近に感じる機会**の提供、教育機関における更なる**農作物と自然環境の活用**が期待される。



結果

① わさび田ツアー (2025年7月13日開催)

都内の中高生、ICUの学生・教職員、地域の方を含む計11名が参加。身近な場所で**わさび田の復活**が起きていた驚きやわさびの**収穫から実食まで**を体験できたことで反響は大きく、参加後のアンケートでは**全員が満足度に最高評価**を付け、わさびへの理解が深まったと回答した。



参加者の声 (抜粋)

自分の目でわさび田を見れて良かった！
知識として知るだけでなく、実際にわさびを味わえたのが良かった！
おろし金の粗さによってわさびの風味が変わることを初めて知った！

図7 わさび田ツアー当日の様子

② わさび学会 (2025年9月10日開催)

ICUの学生約35名が参加。「三鷹大沢わさび」という**共通のテーマ**で環境学だけでなく歴史学や情報科学が**交わった学会**という新鮮さや試食会で**知識と体験がつながった**ことなどが評価され、参加後アンケートでの**満足度は100%**。登壇してくださった教授方からの満足度も高かった。



学生の声 (抜粋)

学内にわさび田があることを初めて知った。
わさびの栽培方法に関する研究があまりされていないことに驚いた。
わさびの美味しさに感動した！
農業を数式で表せることは新たな発見だった。

考察・まとめ

[考察]

得られた結果から今回の2つのイベントを考察すると、わさびの持つ解像度及び潜在性の高さが2つのイベントにおける参加者の好評につながった要因の一つであると考えられる。わさび田ツアーでは学内での栽培環境がわさびの保全に対し**当事者意識**を持ちやすいだけでなく**「復活」**というキーワードが種としてのポテンシャルを秘めていることが参加者に影響したと考えられる。一方でわさび学会では、時間軸の違いという観点から、わさびに関する議論が異なる分野であっても、参加者にとって**わかりやすい分野横断の場**を提供できるだけでなく、わさびから得られる視座の違いが**学際的なディスカッション形成に寄与**していると考えられる。これらのことから、大沢わさびが**希少種**としても**学問としても価値が高い**ものであると言える。

[今後の展望]

今後の展望としては大沢わさびの**広報活動の輪**をさらに広げられることが期待でき、その**コミュニティ形成**や大学の学際性を活かした**議論**が、今後のわさび田の保全活動の周知や認知度の向上に大いに貢献するだろう。

[まとめ]

わさび田にフォーカスした2回のイベントを通して、**わさび田ツアー**というフィールドワークから得た学びを**わさび学会**というイベントへ**帰納的に応用**することで、わさびの生育環境・生育の歴史・農業の最適化など、**多角的かつ学際的な視点**で「わさび」の潜在性と解像度を捉えることができた。従って、それぞれのイベントが相互作用的に機能したことが、最終的に大学の強みである学際性や地の利を活かした議論に発展できたと言える。

[謝辞]プロジェクト遂行にご協力いただいた、国際基督教大学 教授陣の方々、管財グループおよびパブリックリレーションズ・オフィス、大沢わさびの活動に携わる地域の方々、イベント参加者の皆様、そしてご指導ご協力をいただいたすべての皆様に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

